



「いつ、て」

【東京都】成田裕子 60歳

「今日は61(ロクイチ)の担当か……」。小児病棟に配属されて5年目。私も手術後の赤ちゃんや小児がのお子さんの病室を担当するようにになった。

461号室はナースステーションに近い個室で、白血病の8歳のリサちゃん(仮名)が入院していた。2年にわたり、辛くて苦しい抗がん剤の治療を健気に続けてきたが、リサちゃんの病状は悪化の一途だった。日ごとに衰弱していくリサちゃんに、私は「つらいね、いたいよね」と、体をさするくらいしかできず、辛い治療に加担してきたような後ろめたさを感じていた。「嫌われても仕方ない」と思っていた。

せっつかくのママとの時間を邪魔

しないよう、私が検温や点滴の確認を急いで済ませて病室を出ようとした時、リサちゃんがか弱い声で「いつ、て」と言った。私は「早く、あっち行って！」と言われたと思いい、「分かっているよ、すぐ行くね」と答えた。するとリサちゃんはもう一度「いつ、て」と、私を見つめた。

私は自分の間違いに気が付いた。恥ずかしかった。リサちゃんが力をふり絞って「かんごふさん、ここに、いて！」と訴えているのに、「あっちに、いつて」と思いこんだ。看護婦失格だと思った。問もなく、リサちゃんの意識はなくなり、私はきちんと謝ることもできなかった。

あれから35年、それでも私は子どもたちのそばで、看護師を続けている。私をこの職業に引き留めてくれたのは、ユーモアあふれる魅力的な同僚と上司、看護学校の同級生との絆、そして一緒に遊んでくれる子どもたちの笑顔。日々、感謝している。

看護師は、患者さんや子どもたちのそばにいて、許された職業だと思ふ。そばにいてこそ、相手のサインを正しく受けとめ、気持ちを読み取れる。

今でもリサちゃんの「いつ、て」は忘れられない。リサちゃんや多くの子どもたちとご家族から学んだ大切なことを胸に、新しい出会いの中でも活かしていきたいと思ふ。